

大雨よふるな！

（岩浦用水物語）

たつの市龍野町

「ばんぎーいー！」「ばんぎーいー」

農民たちのよろこびの聲が、けいろう山に
こだましていた。

一九五三（昭28）年三月、五年がかりで進
められてきた全長二百三十七メートルの岩浦
井堰ができあがったのだ。

「もうこれで、大雨をおそれなくていいん
だ。」

農民たちは、口々にみんななそう言ってい
た。

この「岩浦井堰」のできるまでの長い間、
「岩見井」と「浦上井」を利用する農民は、
せき止めては切られ、切られてはせき止め
の、大変な水とのたたかいであった。

それが今ようやく、一億九百七十三万円
（当時）をかけて、揖保太子一帯の村々の人
たちの苦しみがすくわれたのである。

井せぎは、農家にとって一年中でもっと
も大切な仕事で、この作業に出ることを、
「大井人足」、または、「あらゆ人足」など
と言っていた。

午前三時、まだまっ暗な中を、あちらの

村からもこちらの村からも、男の人たちが
揖保川の土手を上流にむけて歩いて行く。

農民たちは、もってきた俵の口を開き、

「じょうれん」で川原の小石や砂をすくって
入れはじめた。

いっばいになった口をしめるのは老人。子
どもたちも、ひっしに石をひらって入れる。

、およそ二時間あまりのち、川原
には、二〇〇〇ほどの石だわらがつみあげら
れた。

川西と川東の両方の土手から少しづつ石だ
わらをならべていく。川どこには、「底枠」
という土台がありその上にならべる。一俵は
五・六十キログラムもある。その重いたわら

を何度となく、足場の悪い川原の上を運ぶの
だからたまらない。

午前十時ごろになると、その日の
作業を終える。

次の村にバトンタツトだ。

三日もたつと、川はしだいにせばめられ
中央からだけ流れるようになる。

ここを止めれば、水があがる。

しかし、あまりにも流れがきついので、一
俵や二俵投げこんでもどうにもならない。

そこで、何俵も石だわらをつんだ船をやや
上流からその中央めがけて進めていく。

船が近づく。ワクの上へ、船にのった男た
ちがいっせいに石だわらを次々と落とす。

「もう少しだ！」

船をひっぱる男たちの手にいっそう力が入る。

「水が、水が上がらんと田植えができないぞ！」

水があがりはじめると、田植えは用水路の上流の村からはじめられる。だから、下の田まで水が来るにはかなりの日数がかかる。岩見井の水を利用してゐる太子町や、姫路の網干などの村々はことさら大変であった。

揖保川から引いてきた水を、夏になるとほとんどなくなってしまう林田川に一度落とす。そして林田川に井堰をつくってもう一度水を上げ、田に送っていた。

だから、一年に二度川せぎをした。揖保川で三・四百人、林田川で百人、あわせてのべ五百人の人足を毎年必要としたのだから、大変な苦勞だった。

七月はじめ、田植えはやっと終わった。毎年きまって、田植えが終わると雨がふりはじめる。

これが農民にとって一番の心配ごとだった。

——雨は夜になって、だんだんとはげしくなっていた——。

真っ黒な水が上流から、井堰の上をのりこえのりこえ流れていく。まるでかえるにおそいかかるへびのように。

「門^{もん}び」へとつづく取水路^{しゆすいろ}にもようしやなく
どろ水^{みず}がおしよせている。

よく朝^{あさ}、やっと雨^{あめ}があがった時^{とき}、農民^{のうみん}たち
は荒^あれた「井堰^{いせき}」を見てガツクリとひざまづ
いてしまった。

つい先日^{せんじつ}、あせ水^{みず}たらしてつみ上げた石^{いし}だ
わらが、川岸^{かわぎし}の部分^{ぶぶん}をのこしてあとかたもな
くおし流^{なが}されてしまっているではないか。

取水路^{しゆすいろ}も、すっかり土砂^{どしや}でうまってしまっ
ている。

年^{とし}よりの百^{ひゃく}しようが突然^{とつぜん}言った。

「早^{はや}く、早^{はや}く水^{みず}を上げないと稲^{いね}がかれてしま
う！」

田植^{たう}えを終^おえたばかりの稲^{いね}は、今^{いま}一番^{いちばん}水^{みず}が

大切^{たいせつ}だ。このまま一週^{いっしゅうかん}間^{かん}も水^{みず}が入^{はい}らなければ
大変^{たいへん}なことになってしまふ。

夜^{よる}の明^あけない間^{あいだ}から、たわらをかついで、
井^ゆせぎに向^むかう人々^{ひとびと}の姿^{すがた}がつづく。「一日^{ついたち}
も早^{はや}く流^{なが}された井^ゆを元^{もと}にもどさねば……」
と。

大水^{おおみず}によって井堰^{いせき}がくずされるのは、毎年^{まいとし}
二^に三^{さん}回^{かい}はあったと言う。その度^{たび}に農民^{のうみん}たち
は、それぞれたわらをもちより、石^{いし}だわらを
つくってつみ、うもれた取水路^{しゆすいろ}の土砂^{どしや}をとり
のぞく作業^{さぎよう}に出^でた。

今^{いま}も昔^{むかし}も、水^{みず}は米^{こめ}づくり^{もつと}に最^{たいせつ}も大切^{たいせつ}なもの
である。それだけに、毎年^{まいとし}・毎年^{まいとし}がまさ^{みず}に水^{みず}
とのたたかい、揖保^{いぼ}川^{がわ}の大水^{おおみず}とのたたかいだ



分水施設(揖保郡太子町宮本)



宮本公園(揖保郡太子町宮本)



岩浦頭首工(たつの市龍野町日飼)



だったのである。
「^{おおあめ}大雨よふるな、とり入れの^お終わるまでは、
^{にど}二度と…。」
それは、^{こころ}心からのねがいなのだ。